

<前回>オリエンテーション・導入

授業スケジュール

前期：初期キリスト教から古代キリスト教

オリエンテーション——キリスト教思想史について

1. キリスト教の成立と初期キリスト教	
2. キリスト教の制度化と初期カトリシズム	4/28
3. ヘレニズムのユダヤ教	5/12
4. グノーシス主義	5/19
5. キリスト教教父1——使徒教父、弁証家	5/26
6. キリスト教教父2——オリゲネス、アレクサンドリア学派	6/2
7. キリスト教基本教理の形成	6/9
8. キリスト教の国教化	6/16
9. キリスト教教父3——アウグスティヌス	6/23
10. 研究発表・角元	6/30
11. 研究発表・岡田	7/7
12. 研究発表・長岡	7/14
13. 研究発表・山本	7/21
14. 研究発表・金	7/28

<キリスト教の成立と初期キリスト教>

1. 初期キリスト教：イエスの宗教運動からキリスト教会の形成まで
主要資料：新約聖書の諸文書 → 新約学の研究領域＋隣接分野
2. 新約聖書の記述の歴史性
3. 諸文書の成立年代と様々な仮説：使徒会議とユダヤ戦争、二資料仮説とQ仮説
4. 難問
 - ・イエスの宗教運動と初期キリスト教との関係
復活と聖霊降臨の出来事は何であったのか。
 - ・パウロ書簡の正典編入の意味
「ユダヤ教／初期キリスト教／ヘレニズム」の三者関係における、パウロ的キリスト教の生成過程の問題
5. イエスの宗教運動あるいは初期キリスト教の多様性、単線的な歴史像は後の再構成。
 - ・エルサレムとガリラヤ ・ヘブライオイとヘレニスタイ
 - ・マック「この初期の時代から、イエスの追従者たちの五つの異なるグループ」
6. パウロ書簡の正典化の意味：「ユダヤ教、キリスト教、ヘレニズム」
 - ・異邦人伝道から世界宗教へ ・世俗的共同体への配慮あるいは共存
7. ユダヤ教と初期キリスト教
ユダヤ戦争以降の状況が初期キリスト教とユダヤ教の分離・対立を引き起こした。
ヨハネ文書（教団）の歴史的背景。
8. 初期キリスト論成立の問題
ユダヤ教とキリスト教を分けるもの＝キリスト論
キリスト教はいつキリスト教になったのか。

2. キリスト教の制度化と初期カトリシズム

(1) 制度化の必然性とその意義

1. 宗教運動から教団・制度的宗教へ（初期キリスト教の主要動向）

- ・なぜ、制度化は不可避なのか
- ・制度化は何をもたらすのか

制度と靈的自由の両極性・緊張。

↓

これが、キリスト教史の内的ダイナミズムを生み出す。

- ・制度化を規定する内的あるいは外的な要因

イエスの宗教運動の精神あるいはその記憶、ユダヤ社会への適応。

社会学的研究の必要性。たとえば、方法論としては、

G. タイセン『原始キリスト教の社会学』ヨルダン社。

H・C・キー『初期キリスト教の社会学』ヨルダン社。

2. イエスの宗教運動に即して制度化を論じる。

資料的な制約 → 比較研究の可能性

(2) フェミニスト的聖書解釈の問題提起

0. イエスの宗教運動における徹底的な平等主義

クロッサン『イエス——あるユダヤ人貧農の革命的生涯』新教出版社。

1. 制度化の負の側面を超える思想形成の可能性、歴史の見直し掘り起こす作業。

忘却されてきた可能性の再発見＝考古学としての思想史研究。

「主流のキリスト教は、このキリストにおける男女の平等を否定しなかったが、それを靈的、終末論的に解釈することで、教会の社会関係に適用することを否定した。それにもかかわらず、このようなヴィジョンは、キリスト教の歴史の中で、女性の神秘主義者、女性による宗教共同体、キリスト教的大衆運動——それらのいくつかは、「異端」と定義されるようになった——によって何度も再発見されてきた」（リューサー、63-64頁）

「キリスト教は、この思想を表現するのに、男性のシンボルを選んだために、公認されていない考え方が派生した。つまり、イエスという歴史的人格が男性だったことと、男性である神の子、証しとしてのロゴスが男性であることとの間には、必要な、存在論的な関係がある、というのである。女の姿の神は、正統な三位一体から外された」（同、165頁）

「キリスト教徒によるイエスの考察が、正統なキリスト論へ変化を遂げるのに、五世紀を要した」（同、171頁）

2. 初期キリスト教における女性

「パウロ以前の教会においては、女性が非常に高く評価されている」（荒井、203頁）

「個人の家を教会として宣教活動がなされた」「これらの女性達が家の教会の代表的な役割を果たした」「家を取りしきるのは女性」（同、212頁）

「最初期のキリスト教の「家の教会」において、その成員の間に民族的・社会的・性的差別は完全に廃棄されていたことを強調しています」「時代が下るにしたがって、これが「家父長制化」されていったこと」（同、214）

3. ローマの信徒への手紙

「16:1 ケンクレアイの教会の奉仕者でもある、わたしたちの姉妹フェベを紹介します。

2 どうか、聖なる者たちにふさわしく、また、主に結ばれている者らしく彼女を迎え入れ、あなたがたの助けを必要とするなら、どんなことでも助けてあげてください。彼女は多くの人々の援助者、特にわたしの援助者です。3 キリスト・イエスに結ばれてわたしの協力者となっている、プリスカとアキラによろしく。4 命がけでわたしの命を守ってくれたこの人たちに、わたしだけでなく、異邦人のすべての教会が感謝しています。5 また、彼らの家に集まる教会の人々にもよろしく伝えてください。わたしの愛するエパイネトによる

キリスト教思想研究入門——古代から宗教改革

しく。彼はアジア州でキリストに献げられた初穂です。6 あなたがたのために非常に苦労したマリアによるしく。7 わたしの同胞で、一緒に捕らわれの身となったことのある、アンドロニコとユニアスによるしく。この二人は使徒たちの中で目立っており、わたしより前にキリストを信じる者になりました。」

荒井説（同、214-217頁）：原文の「ユニアン」（対格）は、「ユニアス」（男性）ではなく、「ユニア」（女性）と解すべきである。

「女に使徒などいるはずはないという従来の男性聖書学者達の「常識」が本文の校訂にまで影響を及ぼした」

4. 「男も女もない」の削除。

ガラテヤ 3.28 から、第一コリント 12.13 への変化をどのように解釈するか。

階層性に性的モチーフの導入

（3）牧会書簡の世界

1. 書簡という文学ジャンルの意味

「原始キリスト教の手紙は、そのようなヘレニズムの手紙から派生したという通常の原因」、「パウロの手紙の形式と機能に関する聖書学会セミナーの最初の会合は、パウロ書簡全体の鍵として、ピレモンへの手紙を集中的に研究した」（ドーティ、53頁）、「二十七の新約聖書諸文書のうち、二十一が手紙と称するものである」「手紙がキリスト教正典の中の支配的な文学形式であると認められる。その次に古いキリスト教文学である「使徒教父文書」でも、手紙形式は依然として支配的である」「その後のキリスト教諸文書も、書簡の形式を強く示し続けており、教会史やキリスト教思想の主な記録は、もっぱら書簡形式で書かれた文書から得られるほどである。」（同、56頁）

2. 書簡という形式は、思想内容へいかなる関わりをもつことになるのか。

3. 牧会書簡研究から初期キリスト教へ

「宗教集団成立のきっかけとあった初期の諸伝承から教典が形成されていくにあたっては、核としての宗教体験の再生産を誘導するような表現に、やがて、日常性への還帰をうながすような契機が加わっていく。」（土屋、117頁）、「多様な歴史的現実の諸状況への教団の適応がたえまなく模索されねばならない。新約聖書では、「書簡体文学」という文学類型がそのために導入された」、「教義体系の明確化は主として真正なパウロ書簡においてなされたのに対して、信徒の生活や教団組織をめぐる細かいとりきめの試みは、パウロ後の書簡体文学の課題であった」「牧会書簡」（同、118頁）、「牧会書簡の著者はパウロにならおうとしているが」「全体を支配しているのは、「市民倫理の感覚」である」、「牧会書簡の時代の教会は、内からも外からも市民倫理との対応を迫られていたのである」（同、132頁）、「教会が「神の家」と呼ばれていること」「種々の徳目の背後には、家庭と教会とを類比的にとらえる考え方がある」、「牧会書簡に関して、しばしば「キリスト教的市民性」または「市民的キリスト教」が語られるのは正しい」（同、133頁）

「パウロと牧会書簡とのずれ」「カリスマ的人物としての史的パウロは、「愚か者になったつもりで」「気が変になったように」語る（二コリ一・二一、二三）。ところが牧会書簡の著者は、「平安で静かな生活を、真に信心深く真面目に送る」ことを勧める（一テモ二・二）。これら二つの行動の類型は、時間的に継起するものというよりも、教会形成のダイナミックスを現出する場の両極を示す。」（同、153頁）

（4）初期カトリシズム

1. 「初期カトリシズムの本質的な特徴は二世紀に現われる。教会の機構はもはや自由なものではない。初期の時代において、教会は「長老たち」によって指導を受けることがで

きる場合もあるし、あるいは、そうでなかった場合もある。教会は、定まった教職を必要としなかった。機構は、救いをもたらすものではなかった。しかし、この事態は変化する。すでに一〇〇年頃、アンティオキアの司教イグナティオスは、教会概念を司教[Bischof]、司祭[Presbyter]、助祭[Diakon]という三層の位階制に結び付けている。救済は、もっぱら御言葉、霊、信仰に結び付けられているのではなく、救済の力の特別な仲介者である聖職者に結び付けられている。聖職者によって聖礼典が管理される。霊は、教職に結び付けられる。伝承の継承、純粋な教義の保存、その解釈も聖職者によって執行される。しかしまた、教職から聖職者への移行も、法に則して合法的に規制されねばならない。「継承」という思想が形成されたのである。すなわち、後継者は単に外面的な尊厳を受けるのみならず、かの義務を実行することを可能ならしめる霊をも受ける、そして彼は、使徒の教えという伝承を受けるのである。もし、このような特徴から論を進めるのであれば、ルカの神学を初期カトリシズム的である、と特徴づけるのは事態にかなったことではない。それに対して、初期カトリシズムの痕跡は、ほど同時代の『クレメンスの第一の手紙』において認めることができ、よりはっきりとした姿では少し後のイグナティオスにおいて認められる。」(コンツェルマン『原始キリスト教史』、24-25頁)

2. 「事態は展開し、またあの教会の発展という諸帰結が継続的に維持されたのである。この支えとなったものが、高められ、現存し、すべてに浸透する霊なるキリストへの信仰であった。この信仰は新しい教団を組織する力である。この信仰は、神の霊と同一であるキリストに対する信仰、という唯一の新しい信仰箇条を生み出す。この信仰はまた、キリストにおいて神を崇拜すること、バプテスマによって聖餐にあずかること、という内容を持った祭儀を生み出す。新しい教団については、この祭儀によってのみ語るができる。この信仰は新しい倫理を生み出す。この倫理によってキリスト教徒たちが現世に対して結合し、そしてこの倫理が、罪ある現世執着の人間であった彼らを、キリスト共に死に、霊ある生、すなわち神に自らを捧げ、兄弟を愛する新しい生へとよみがえったものとして生かすのである。その際、教義や祭儀や倫理はまだ自由で変動しやすく、素朴で流動的で捉えがたい」(トレルチ、116-117頁)

「社会学的関係を成り立たせる要因のために、社会学的欲求はより強い基盤、より客観的な見解、実際に実行可能な限界づけ、より明晰な関連、より首尾一貫した解釈の確実性を要求した。この要求からとりわけ独特なキリスト教的な祭司制度 Priestertum、司教職 Episkopat が生じた。これは、新しいキリスト教聖書、即ち新約聖書、司教たちによって確実なものとした正当な伝統の強調、新しい祭儀行為において奇蹟の働きを確定し、合法的な教団においてのみ、正当な聖職者の手によってのみ sacrament が執行されうるとする sacrament の理念の完成、これらと密接に関連している。これが、パウロ主義以後の、福音からの偉大な第二の形成、即ち初期カトリシズムの成立である。」(同、117-118頁)

3. 聖餐式の起源の問題 → sacrament とは何か。

J. エレミアス『イエスの聖餐のことば』日本基督教団出版局。

<参考文献>

1. R=R・リューサー『性差別と神の語りかけ——フェミニスト神学の試み』新教出版社。
2. 荒井献『新約聖書の女性観』岩波セミナーブックス。
3. ドーティ『原始キリスト教の書簡文学』ヨルダン社。
4. 土屋博『教典となった宗教』北海道大学図書刊行会。
5. E. トレルチ『古代キリスト教の社会教説』教文館。